

中国新移民とカンボジア・シアヌークビルの社会的変容：
一帯一路を背景に

**New Chinese Immigrants and the Social Transformation of
Sihanoukville, Cambodia: In the Context of
Belt and Road Initiative**

李 崗、板垣 武尊

Gang Li and Takeru Itagaki

要旨：本研究は、「一帯一路」戦略の推進を背景に生じた中国新移民の移動がカンボジアの観光地シアヌークビルにもたらした社会的変容を、カンボジア華人社会の歴史的変遷を踏まえて考察する。背景や動機の多様性と高い流動性に特徴付けられる中国新移民は、シアヌークビルをバックパッカーの町から開発途上のカジノの街へと変容させた。歴史的に現地化したカンボジア華人とは異なり、中国新移民はシアヌークビルの現地社会との接触が限定的であり、エスニック・エンクレーブ (Muttarak, R. 2017) を形成している。一方、ライフスタイルを求めて積極的に現地社会に溶け込もうとする新移民も現れている。カンボジア華人、中国新移民、現地住民は重層的な関係を織り成しており、そのダイナミックな関係の中でカンボジア社会はこれからも大きく変容すると予想される。

キーワード：中国新移民、社会的変容、一帯一路、シアヌークビル

Abstract: This study examines the social transformation that have occurred in a Cambodian tourist destination, Sihanoukville, resulted in the influx of new Chinese immigrants in the context of the Belt and Road Initiative, considering the historical shift of the Cambodian Chinese community. Characterized by the diversity of backgrounds and motivations as well as high mobility, new Chinese immigrants have transformed Sihanoukville from a backpacker's town into a city under development with a focus mainly on casinos. Unlike the localized Cambodian Chinese, new Chinese immigrants have limited contact with the local society in Sihanoukville, forming an ethnic enclave (Muttarak, R. 2017). Simultaneously, there are also newcomers who are in pursuit of a different lifestyle actively seek to integrate into the local community. Cambodian Chinese, new Chinese immigrants, and residents have interwoven complex relationships, and within this dynamic, it is anticipated that Cambodian society will continue to undergo significant changes.

Keywords: new Chinese immigrants, social transformation, Belt and Road Initiative, Sihanoukville

1. はじめに

本研究ではカンボジアの観光地シアヌークビルを事例に、「一帯一路」戦略の推進を背景に急増した中国新移民が現地社会にもたらした社会的変容を、カンボジア華人社会¹の歴史の変遷を踏まえて考察することを目的とする。

長年の動乱を経験したカンボジアは1991年に政治的和解が実現された。新政権では、中国大陆、香港、台湾、ベトナムなどから入国する中華系移民が次第に増加した。2013年に中国政府は「一帯一路」戦略²を打ち出し、同戦略の一部を構成する「中国—インドシナ半島経済回廊」では、カンボジアが東南アジア諸国連合（ASEAN）の主役と位置付けられ、ASEAN内でイニシアチブを取ることにについて主要な役割を果たしている。「一帯一路」戦略のもとで、巨大な中国の公私資本がカンボジアに流入し、投資先と雇用機会を求めてカンボジアへ渡航する中国人の移民フローが形成された。

1978年改革開放に舵を切った後に海外へ移住した中国人のことを一般に中国新移民と呼ぶ。グローバル化の進展と中国の国際的プレゼンスの向上を背景に生じた中国新移民による国際移動は、移民の出身地や移民先、移民動機、移動頻度、定住意向など多方面において、従来の華僑華人と異なる様相を呈している。山下は、中国新移民によって世界各地で形成されたニュー・チャイナタウンを比較研究し、オールド・チャイナタウンとの対比で中国新移民の特徴を析出している（山下 2019）。中国系ニューカマーズが地域にもたらす変容を日本とイタリアの事例を比較している田嶋（2018）は、中国系ニューカマーズが起業することで移民先地域は再活性化している一方、ホスト社会への社会的統合に向けてホスト社会と移民コミュニティの相互の理解と努力が求められていると指摘している。張（2018）は、一帯一路の推進で活発化した中国とポーランド間の国際移動に注目し、グローバルに広がる移民ネットワークを生かしつつ生活の質向上を求める中国新移民の姿を描き出している。

他方、「一帯一路」戦略において中国政府は、文化ソフトパワー（中国語で「文化軟實力」）の向上を目標の一つとして掲げており、文化交流や観光往来の促進も重要な分野と位置付けている。中国新移民や中国人観光者による現地行動は広義的な「文化外交（中国語では公共外交）」として考えられる。大谷（2022）は2018年から2019年の間に一帯一路をテーマに発表された34篇の英語論文をレビューし、従来研究の主流をなしている政治経済学的研究に加え、2018年から中国新移民を含む国際移動に研究関心が集まるようになったことを明らかにしている。奈倉（2018）は、中国の公共外交をマクロな視座から考察を行うこれまでの研究は、中国新移民の日常生活におけるダイナミクスを看過しており、中国新移民の海外移住をめぐる現地との関係ファクター間の相互作用に焦点を当てる必要があると指摘している。2017年以降に「一帯一路」戦略を背景に急増しているカンボジアの中国新移民について、移民の属性、移住動機、移民ネットワーク形成などをめぐる研究はある

程度蓄積されている (P. Nyiri 2014; Chen, S. A. 2018; 朱 2020) が、まだ研究の初期段階にあると言わざるを得ない。特に中国新移民とカンボジア華人や現地住民とのインタラクティブに焦点を当て、ミクロな視点から中国新移民が現地社会にもたらした社会的変容を明らかにする研究は、管見の限りまだ少ない。

本研究はカンボジア・シアヌークビルの中国新移民を研究対象とする。本論ではまずカンボジアにおける中国人の移民史を整理し、中国新移民が置かれる歴史的、社会的文脈を検討する。次にカンボジアの観光都市シアヌークビルを事例地に、「一带一路」の推進がもたらした華人社会の変容を分析する。第4節ではシアヌークビルの都市景観と観光事業における変化を分析し、カンボジア華人、中国新移民、現地住民の三者間の関係を考察する。分析・考察を行う際、関連先行研究、政府発表資料、報道データを用いるほか、2023年2月にカンボジアのプノンペンとシアヌークビルにおいて、李と板垣が実施した現地調査に基づく。現地調査では、シアヌークビルにおける都市景観の変化をつぶさに観察・記録し、カンボジア華人、中国新移民、欧米人のビジネス従事者、カンボジア人、外国人観光客などできる限り多様な人々に対して聞き取り調査を実施した。言うまでもなく、1回の現地調査では過去10年の間にカンボジア・シアヌークビルで起こった劇的な変化の全容を解明できるとはとうてい思えない。コロナ後のシアヌークビルにおける中国新移民の動向を今後引き続き注視していくが、本稿はその長期プロジェクトの初歩的考察とする。

2. カンボジア華人社会の形成と変遷

2.1 カンボジア華人の移民史

まず、カンボジア華人社会の歴史の変遷を整理しておこう。中国人移民が大量にカンボジアに流れ込むのは、1998年以降のことであるが、中国人が東南アジアへ進出する歴史は古く、歴史記録では宋の時代に遡る。19世紀80年代から始まるフランス保護領時代に、中国人はプランテーションの労働力や仲介商としてカンボジアに移住し中国人コミュニティを形成した。ニュージーランド籍の人類学者 W. E. Willnott が行った調査では、1890年に13万人だった華人が1949年には約42万人に増加し、そのうち潮州籍が7割を占めていた。潮州籍のほか、広府籍、海南籍、客家籍、福建籍の順に人数が多かった (W. E. Willnott 1970; 7)。フランス保護領政府は、本籍地と方言に基づいて華人にそれぞれ「幫」組織を作らせ、各幫の長に戸籍管理や治安維持、民事調停を含む自治権限を委任し華人に対する間接統治体制を敷いた。1952年に人口35万人がいたプノンペンには、11万人の華人が生活していた (綾部・石井 1996; 95)。

1953年にフランスからの独立を果たし樹立したシアヌークビル王国政権は、華人の経済力に頼り国民経済の再建に取り組みつつ、華人のカンボジアへの国民統合を図った。1954年11月にカンボジア王国政府は新国籍法を頒布し、華人がカンボジアの国籍を取得する条

件を緩和した。また1956年3月19日に「十八種職業に対する外国人の就職、経営を禁止する命令」を發布し、華僑華人が18種類（税官吏、船舶業務代理人および水上関係職員、武器承認、印刷業、穀物商人など）の職に就くことを禁じた。2年後にフランス保護領時代の「幫制度」を引き継いで成立した中華理事会はカンボジア政府に強制解散された。中国にある出身地に対する親近感を持ちつつ、カンボジア国籍を取得しカンボジア国民になることを選択した華人が多く現れ、カンボジア華人の現地化が進んだ。1970年から続いたカンボジア国内の長期的混乱、特にボル・ポト率いるクメール・ルージュ政権による大虐殺は、カンボジア華人に壊滅な打撃を与えた。華人人口は20世紀60年代から半減し、25万人となった（彭 2000）。

カンボジア華人が政治的に平等な地位を回復し、華人ネットワークの再組織が発足したのは、カンボジア政局が比較的安定した以降のことである。1993年にカンボジアが国連の支援の下に民主体制へ移行したが、民主化が実現するまで華人は3回の政権転換を経験し、いずれの政権下においても排斥や差別の標的とされていた。その間で、カンボジアの華人社会の現地化が着実に進行し、2006年時点でカンボジア華人の90%がすでにカンボジア国籍を取得していた（野澤 2006; 53）。1990年代初頭、柬埔寨東華理事会総会と各州支部、同郷組織の会館、同姓団体の宗親会など各種の連携互助組織が再出発し、華人ネットワークが回復を遂げた。カンボジア華人³は経済界にとどまらず、政界にも大きな影響力を発揮するようになった（野澤 2004）。しかし、カンボジア生まれの華人2世、3世は華人としてのアイデンティティの個人の濃淡さがあるとしてかなり希薄化した（稲村 2003）。

2.2 民主化以降に流入した中国人新移民

カンボジアでは1989年から対外開放政策が実施され、1990年代初期に経済回復の兆しが見えはじめた。1994年8月4日に王国投資法が公布されて以降、中国大陸をはじめ、台湾、香港、シンガポールなどの企業が資本投下しビジネス経営を展開させるようになった。

朱（2020）はカンボジアの中国新移民の移住動機を、プッシュ要因とプル要因のフレームワークを用いて分析している。中国とカンボジアの両政府による協力強化の合意を背景に、中国政府による国民出国条件の緩和と海外投資の促進と、カンボジアの平和実現と投資機会の誘引が相互作用し、結果的に中国新移民のカンボジア移住が生じた。さらに朱は、1990年代以降のカンボジア中国人移民の過程を初期（1991～1998）、発展期（1998～2010）、急増期（2010～現在）の3つの時期に分け、それぞれの時期における移民の属性、目的、人数を整理している。初期では、鉄道、電力、通信など国家レベルのインフラ建設のため、中国国有企業の駐在員、インフラ建設に携わる技術者や建設労働者などが移住した。発展期に入ると、中国政府は大型国有企業と有力私営企業に対して「走出去（海外へ投資し、新たな市場を開拓する）」を奨励し、中国企業のカンボジア進出が顕著となり、自ら資本投下してビジネス経営を行う個人投資家も増えてきた。急増期では、「一帯一路」戦略の下で

経済、政治、文化の多方面において両国の連携が深化し、個人の事業拡大や社会資本の再生産という動機に駆られて出国した新移民が急増している(Chen, S. A. 2018)。この時期に、プノンペンやシアヌークビルの不動産やカジノを投資先とする中国資本の進出が加速化したという。

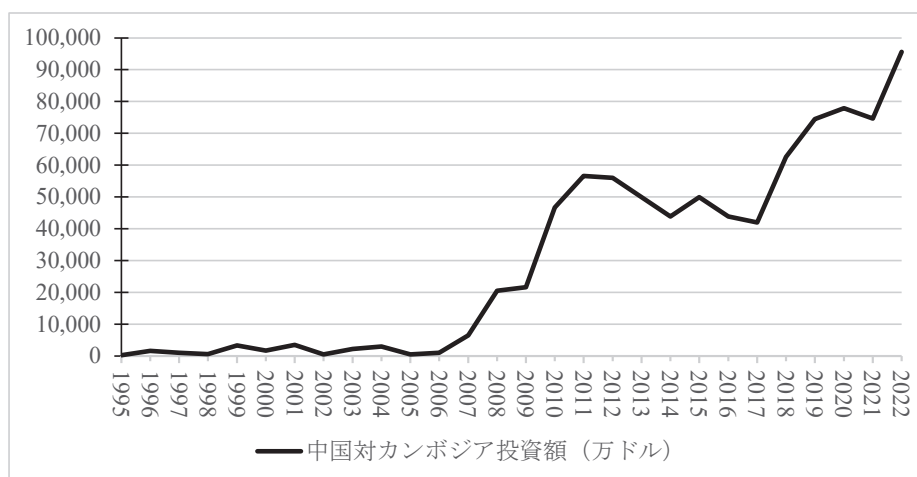


図1 中国対カンボジア直接投資額の推移 (1993年～2022年)

注：筆者作成。1995年～2014年の数字はChen, S. A. (2018)のTable 2から引用。2015年～2022年の数字は中国商務部と国家統計局、国家外貨管理局が2009年から年度ごとに発行している「中国対外直接投資統計公報」のデータに基づいている。

図2は中国のカンボジアに対する直接投資額の推移を表している。中国自体の経済困窮の理由もあり、1990年代では中国対カンボジア直接投資は目立ったものではないが、2007年前後から急成長してきた。中国企業による投資の主力は縫製業であるが、2018年以降観光業（ホテル建設、観光地開発）やインフラ（高速道路、病院、商業センター）分野への進出が顕著になっている（友田 2021）。

移住先に到着した中国新移民が情報交換や相互扶助のため、血縁・地縁関係を通して「関係」のネットワークを構築することは、中国人移民に一般的に見られる生存戦略である。カンボジアでの中国新移民の活動が活発化している2010年以降、カンボジア各地で中華系同郷会や商会在雨後の筍のように成立したことがそれを如実にも物語っているといえる(Chen, S. A. 2018; 朱 2018, 2020)。朱(2020)が集計した36の中国新移民による「同郷会」や商会のうち、33の組織が2011年以降に成立したものである。同じ省の出身者が集まる同郷会もあれば、カンボジア泉州同郷会のように省の下位単位でネットワークを構築するケースも見られる。

3. 「一带一路」の推進とシアヌークビル華人社会の変化

シアヌークビル市はカンボジア南部のタイランド湾沿いに位置している。1960年代から大型船が停留できる深水港として開発が進んだ。現在でもカンボジア国内唯一の国際港として機能しており、国道4号線によって首都プノンペンと繋がっている。2022年に中国政府の援助で高速道路も開通し、従来6時間かかった両都市間の移動が2時間に短縮された。加えて、市内から20km離れる場所にあるシアヌークビル空港は、2016年から国際線の旅客輸送が始まった。コロナ中に一時的に飛行停止したが、シアヌークビルをベトナム、フィリピン、中国の諸都市と繋いでいる。

シアヌークビルにおいては、フランス保護領時代から中華系移民が生活していたと考えられる。2023年2月の調査では、シアヌークビルの沖内のロン島の西部に位置する集落において華人系と見られる住民の家屋が数軒確認された。集落の華人系住民のほとんどが60代以上と見られ、また中国語を解さない⁴ことから、1970年ごろからの混乱期に本島から避難してきた人びとと推測される。旧市街地と現在シアヌークビルの象徴とされるモニュメント、ゴールデンライオンに繋がる道路の途中で、東南アジアの華人間で広く信仰される「本頭公⁵」を祀る廟（写真1）が、カンボジア華人組織「西港東華理事会」を冠した名前で再建され、1996年2月9日に記念セレモニーが開催された。当時の来賓サイン簿のサインから当日80名近くの要人が来場したことを確認できた。シアヌークビル唯一の華人学校・港華学校（写真2）も1990年代前半に開校したことを勘案すると、遅くとも中国新移民がシアヌークビルに到着する初期段階において、カンボジア華人のネットワークはかなり回復したと推測される。



写真1 西港東華理事会・本頭公廟の入り口 写真2 シアヌークビルの華語学校・港華学校
李撮影（2023年2月） 李撮影（2023年2月）

シアヌークビルは「一带一路」推進の重点基地と位置付けられており、市の東部にあるシアヌークビル経済特区（Sihanoukville Special Economic Zone：SSEZ）は、2008年に中東国家間の協定に基づくモデル事業として始動した。特区の敷地面積は1113haであり、2期に分かれて建設すると計画されている。完成後、300以上の企業の受入れができ、8～10万人近くの雇用が生まれると期待される（中国商務部 2011）。2019年にはすでに174社が進出し、総輸入・輸出額は12.4億USDに達した（Wang et al. 2021）。

SSEZ 経済特区の建設は進出企業の経営者や技能者、建設労働者の移住をもたらし、同時に市内の不動産やカジノホテル、リゾートの開発に携わる個人投資家が大量に到来した。さらに、中国人を対象とする飲食店、卸・小売店、インターネットなどの各種生活サービスを提供する従事者も急増した。シアヌークビルの中国新移民は、職業別に4種類に大別できる。①政府間協定に基づく大規模プロジェクト建設を手掛ける中国国有企業や民間企業に雇用される中国人（現地採用を含む）、②各種民営企業の経営者と従業員、③レストランや卸・小売業など主に中国人を対象としたエスニックビジネスの経営者と従業員、④オンラインカジノなど不法ビジネスの従事者である。2006年にプノンペンを中心にカンボジア各地に散居していた中国新移民が5～30万人と推測されるが（庄 2009）、2017年以降の投資ブームに後押しされて、2019年にシアヌークビルだけで30万人の中国人が生活するようになった（南七道 2019）。

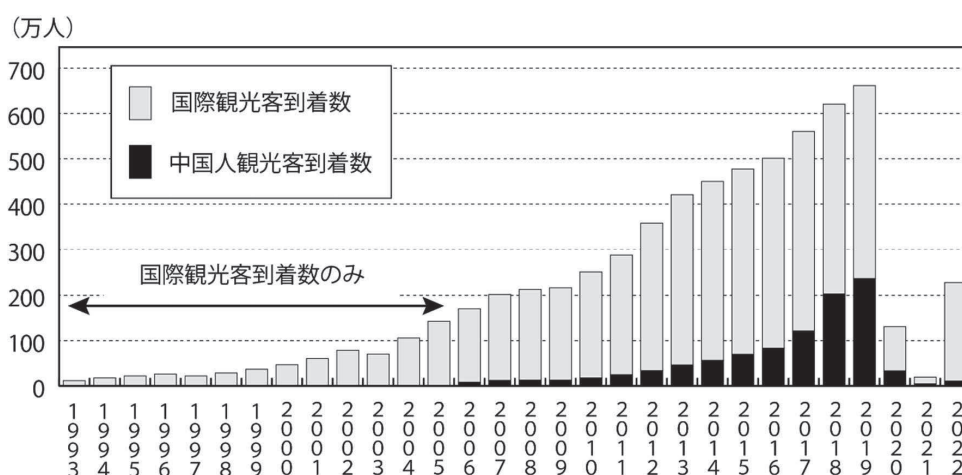


図2 カンボジアの国際観光客到着数と中国人観光客数の推移（1993～2022）

出所：2007年からカンボジア観光省によって年度ごとに発行される「観光統計レポート」（2007年～2022年度）のデータに基づいて作成。なお、1993年～2006年のデータは、2008年版のレポートに掲載されている。

注：1993年～2005年における中国人観光客数の統計データは存在しない。参考としてカンボジア入国管理局の統計では、1999年に入境した中国人は約5万人である（彭 2000）。

中長期滞在者に加えて、陸・空路でシアヌークビルを訪れる中国人観光者は2010年ごろから急増した(図2)。特に2017年から江蘇省・無錫、昆明、広州など中国の主要都市とシアヌークビルを繋ぐ直行便が相次いで開通し、空路の利便性が一気に改善した。シアヌークビルに到着する中国人は2018年前半だけで84,664人に達し、外国人観光者全体の43.63%も占めていた(Pisci. H 2018)。コロナ感染症が世界を席捲する前の2019年に、ビジネス目的で入国した中国人だけで過去最多の1,046,213人となり、カンボジアに到着した中国人全体(2,361,849人)の44.2%を占めている。2018年の438,352人から2倍以上も増加し、ビジネス客が2番に多い台湾(32,528人)を大幅に上回っている。

カンボジアの華人社団を分析した野澤(2004)は、僑生華人と新客華僑(中国新移民を含む)が共生関係にあると指摘し、中国新移民がカンボジアでビジネスを展開するにあたって経済的・政治的に有力なカンボジア華人の協力が不可欠であるが、カンボジア華人が自身のビジネスを拡張するため、今後中国新移民との積極的合作連携が増加すると予想している。ところで、実際にシアヌークビルにいる中国新・旧移民はどのような関係にあり、また中国新移民の流入がシアヌークビルの観光と地域社会にどのような変化をもたらしたのか。次節ではカンボジア華人、中国新移民、現地住民の三者間の関係性に注目し考察を進める。

4. 中国人移民と観光地シアヌークビルの変容

4.1 都市景観の変化：バックパッカーの町から「第2のマカオ」へ⁶

中国新移民がシアヌークビルにもたらした最も可視化できる変化は、都市景観の変容といえる。シアヌークビルの観光開発の歴史は浅い。1970年代の混乱期までプノンペンや周辺都市の住民の行楽地として利用されていたが、本格的な開発は1990年代以降のことである。90年代にカンボジアの政治情勢が落ち着くと、西洋人バックパッカーが観光のパイオニアとしてシアヌークビルに到着し、新しい中継点として移動ルートに組み込むようになった(板垣 2019)。市内ではフランス保護領時代に建設されたフランス風の住宅が旧市街地に残っている(写真3)が、バックパッカーの眼差しは主に透き通る熱帯の海、白い砂浜が広がるビーチ、悠然とした異国の生活に向けられていた。主要交通拠点のバスターミナルや市内のメインストーリー沿い、市街地から近いビーチ周辺には、欧米観光者を対象に地元出身者や元欧米バックパッカーによる各種ビジネスが展開された。カンボジア華人も観光事業に参入し、ゲストハウスやレストラン、小売業などの事業に進出しはじめた。ところが、当時シアヌークビルを訪問する観光者数の規模自体が小さく、都市景観の変容が一定範囲内に収まった。



写真3 旧市街地にあるフランス風建築
李撮影 (2023年2月)



写真4 中国投資で建設中の高層ビル
李撮影 (2023年2月)

2008年にSSEZ建設が一带一路のモデル事業と認定され、シアヌークビルは巨大な資本投下を受けて都市開発が急速に進んだ。シアヌークビルでの中国投資は主にマンション、カジノホテル、海浜リゾートに投じられ、短期的な利益追求「Short-Term Investment: STI」に特徴づけられている。市内では海浜エリアをはじめ、市街地のいたる所で建設ラッシュが起こり、街全体が巨大な工事現場の様相を呈している。このような無計画な都市開発は、2019年にオンラインギャンブルが禁止されコロナで多くの中国人が帰国するまで継続していた。一部のメディア報道では、カジノの町に急変したシアヌークビルを「第2のマカオ」と批判している (Fullerton 2018)。また中心市街地には中国語で書かれた看板が随所に見られ、中国人観光客を含む中国人向けの飲食店、ホテル、金融機関、小売店、病院などが立ち並ぶようになった (写真4)。2017年からの建設ブームを経て、カジノホテルの数は2014年の57軒から150軒に増加したが、2023年2月6日時点で市内の1006棟の高層ビルのなか、完成したのは558棟に留まり、303棟が建設中、残り359棟が完全停止した状態にある (Reuy.R 2023)。

都市景観が急激に変化するなか、都市計画や環境保護の観点から投資規模や開発方法、事業推進の速度を制御することは、シアヌークビル市政府の管理能力では実現できないのが現状である (Calabrese, L., & Wang, Y. 2023)。またシアヌークビルで生活している中国人は、中国国内でのライフスタイルを現地に持ち込み、デリバリーやオンラインショッピングなどのサービスを提供するアプリまで開発された。

中国投資や中国新移民が、観光地としてのシアヌークビルの都市景観にもたらした変化は顕著である。少なくともシアヌークビル市内は、バックパッカーに好まれる静かなビー

チリゾート地から発展途上のカジノの町へと変容した。次節からカンボジア華人と中国新移民がそれぞれ携わる観光事業の事例を紹介し、シアヌークビルにおける変容を別の角度から描きだす。

4.2 カンボジア華人の観光事業

1990年代のシアヌークビルはベトナムとタイと陸路でつながり、風光明媚な未踏の地として欧米のバックパッカーの間で次第に人気を博した。バックパッカーをターゲットにしたゲストハウス、飲食店、ランドリー、ツアー代理店などは、数は少ないが市街地に登場しはじめた。観光開発の第1波ともいえるこの時代に誕生した起業者のなかに、カンボジア華人が含まれる。

・事例1：ゲストハウス（旧市街地）

当ゲストハウスは、旧市街地の歓楽街に近い場所に位置している。かつては夕陽が眺められる絶好の立地であったが、現在すぐ近くの海岸付近に高層ビルが建ったため海がほぼ見えなくなった。ゲストハウスは3階建てで約21室を備え、ドミトリー、シングル、ツインの3種類の部屋スタイルがある。温水シャワーや扇風機、エアコンの有無により宿泊料金が7～20ドルまで異なる。

ゲストハウスのオーナーはプノンペン出身の70代の女性A氏であり、フランスとロシアへの留学経験を持ちフランス語と英語が話せるという。A氏はカンボジア人と自称しているが、ゲストハウスの入り口に中華系の慣習とされる対聯と鎮宅平安符が飾ってあることから、カンボジア華人、もしくはカンボジア華人と緊密な関係を持っていると推測される。

先述したように1990年代にシアヌークビルはバックパッカーの町として名を知られ、国内客も訪問するレジャー地へと発展を遂げた。1994年にビジネスチャンスを求めて、英語が得意なA氏はプノンペンから移住し、言語の強みを生かして欧米人バックパッカーに宿泊サービスを提供しはじめた。のちに現在地の元土地所有者から土地所有権を取得し、2003年にゲストハウス事業を本格的に手がけた。2013年に政府から営業許可を取得し正式認定の宿泊施設となった。2023年2月の調査時点で、カンボジア人スタッフ4人を雇用しており、10数名の利用者が滞在していた。利用者は世界各国から来ており、中ではフランス人が一番多いという。定年退職したロシア人は、2、3ヶ月から半年間も滞在し、ゆったりとした生活を送るという。2017年前後から多くの欧米人バックパッカーは、中国人の町になりつつある市内から沖合のロン島またはロング・サンルーム島へ滞在先を変えたため、客を多く失ってしまったという。

・事例2：バンガロー（ロング・サンルーム島）

当施設は、ロング・サンルーム島の主要棧橋から徒歩数分のビーチ沿いに立地している。すぐ近くに海が広がるが、施設自体は森に囲まれており、9棟の独立したバンガローが各所に分散している。当施設は2016年にオープンし、2023年2月の調査時点で3人のスタッ

フが働いていた。オーナーのB氏は、40代の女性でプノンペンに在住している。カンボジア華人のスタッフによると、B氏は海南島出身の華人4世であり、中国語は話せない。現地クメール人と結婚しているという。バンガローの主な客層は40～50代の欧米人で、夫婦か友人同士が一棟貸しで利用するのが一般的である。周辺のゲストハウスに比較して料金がいため、バックパッカーによる利用は少ない。

事例1では、カンボジア華人、もしくはカンボジア華人と緊密な関係を持つA氏がシアヌークビル観光の初歩段階から観光事業に参入し、欧米人バックパッカーの増加とともにビジネスを拡大してきたプロセスがうかがえる。しかし、中国人新移民の大量流入と中国投資による急速な都市開発は、欧米観光客の本土離れを引き起こし、A氏の事業も苦境に立たされる事態になった。他方、滞在地を本土から沖合のロン島やロング・サンローム島にシフトした観光客を受け入れているのは、B氏のようなカンボジア国内事業者が2010年代に開業した施設である。

4.3 中国新移民による観光事業

・事例3：小規模ホテル（中心市街地のゴールデンライオン付近）

50代の経営者A氏は広東省仏山の出身で、2017年にシアヌークビルに移住した。A氏の息子は、観光ビザでカンボジアに入国しプノンペンとシアヌークビルのビジネス環境を視察した。息子からシアヌークビルに商機があると聞いたA氏は、国内で経営しているスーパーを息子に任せ独自でシアヌークビルに移り住み、当ホテルを開業したという。ホテルの室数は不明だが、利用客のほとんどが中国人であり、部屋の一部を中国企業の従業員の寮として長期レンタルしているという。

A氏は市内にある中国人経営のスーパーから生活必需品を購入し中国人経営のレストランで食事をとり、生活面では不便を感じていない。基本的な挨拶用語以外クメール語を理解できないが、普段現地住民とほぼ接点がなく、必要な時はボディランゲージで意思疎通を図っている。現地住民と中国人とは、同じ都市にしながら、異なる「圈子」（生活空間）で生活しているという。中国人の投機行為に対して、A氏は「商機と思ったとたんに、全員が落ちこぼれを恐れて参入しようとするから、マーケットが大混乱している。」と不満を漏らした。

・事例4：中華飲食店（旧市街地のバスターミナル付近）

中心市街地にあるバスターミナルが位置する通りの裏側に、中国街という東西に伸びる長さ約70mの通りが見える。1階が店舗、2～3階が住宅という構成の低層建築が通りの両側に整列するが、1軒だけの高層ビルが聳え立つ。潮州出身のB氏が経営している広東料理店が低層建築の一角にある。当レストランは2018年9月に開業し、看板料理は「香港焼臘（香港式ロースト肉料理）」である。B氏が子供を連れて中国国内から移住してくる

前に、夫が別のビジネスでシアヌークビルに長期滞在していたという。現在家族3人で生活しており、レストランのほか、他の事業にも携わっているが、詳細は不明である。店内では現地女性は1人、厨房補助として働いており、B氏と中国語で会話している。当店はスマートフォンアプリで在住中国人にデリバリー販売もしている。筆者らが調査している時、カンボジア人の配達員がB氏に、中国人が集住しているアパートメントの警備員に止められて注文者に届けられなかったと中国語で訴える場面に遭遇した。

コロナ前に、B氏は潮州新移民による社団組織「潮汕商会」の活動に参加していた。潮汕商会は2017年に潮州出身の新移民が作った同郷会組織であり、東埔寨中国総商会の下部組織として活動している。しかし、2019年から多くの潮州出身者がプノンペンに回流したり帰国したりしたため、潮汕商会の活動が実質的に停止しているという。

・事例5：ダイビング教室（ロング・サンローム島）

ロング・サンローム島にあるダイビング教室を経営しているのは、中国東北出身のC氏である。カンボジアに来る前に中国国内でIT関連会社に勤めていたが、仕事を辞めて5年間プノンペンに住んでいた。2019年にロング・サンローム島に移住してきた。現在10代の子供と2人で生活しており、妻は中国国内にいるという。

移住動機について、「ライフスタイルを変えたいから。島での生活はシンプルで、住民の人たちが非常に親切。人間関係をめぐる悩みも少ない。」という。かねてからのダイビング愛好者で、世界各地を旅してダイビングを楽しんでいた。ダイビング教室は、現地住民の土地所有者と他の中国人と共同経営している。顧客のほとんどは欧米人で、中国人観光客やカンボジア国内客は数少ないがいる。シアヌークビル本土の観光について、「本土は観光に適さない。観光発展に必要なインフラが整っていないから。賑わいが好きな人はともかく、レクリエーションを求める観光客はやっぱり島に来ている」という。

以上の事例から、シアヌークビルにいる中国新移民の出身地、移民動機や移民ルート、事業内容、現地住民との関係性における多様性を垣間見ることができる。歴史的にカンボジアの中華系移民は福建、広東、海南の出身者が多かったが、現在シアヌークビルにいる中国人のなかにA氏やC氏のように、既存の移民ネットワークに頼らずに中国各地の移民パイオニアとして到着した人びとが含まれる。潮州新移民は従来の同郷会組織を介して、異国でのネットワークを拡大してきたと考えられるが、異国での事業が挫折すると、現地ネットワークから一時であれ離脱し、出身地に戻るか別の地域にあるネットワークに結びつける機会を探す。いずれの場合、中国新移民はグローバル化した世界で高い移動性と移動能力を見せている。

現地社会への適応の度合いにおいて、シアヌークビルに在住する中国人のあいだで大きな差がみられる。中国語話者を対象にビジネスを行い、中国人向けの店舗やサービスで各種の生活需要を満たし、現地住民と並行して生活している中国人は大部分を占めるだろう。

A`氏はその典型と言える。B`氏は、ビジネス上の必要性から現地カンボジア人を雇用しているが、やり取りにおいて中国語を使用しており、「ずっとここにいるわけではないから」という理由でクメール語を習得する意欲を見せていない。ダイビング教室を現地住民と共同経営しているC`氏は、むしろ希少な例と言わざるをえない。すでに現地化したカンボジア華人とは異なり、全体的に中国新移民はシアヌークビルの現地社会との接触が限定的であり、一種のエスニック・エンクレーブ (Muttarak, R. 2017; Bühler, T. 2020) を形成しているといえる。

5. おわりに

本研究では、1990年代以降にカンボジアに到着した中国新移民が形成したコミュニティの輪郭を描きだし、現地での生活実態を個別具体的な移民のストーリーを通して明らかにした。中国新移民は異国での生活やビジネスのために、従来の華僑・華人ネットワークを活用しつつ、移民先で新しい生活空間やネットワークを創出しようとしている。また背景や動機の多様性と高い流動性に特徴付けられるカンボジアの中国新移民は、シアヌークビルの都市景観と観光事業に急激な変化をもたらし、その結果カンボジア華人や現地住民から厳しい批判を向けられている。一方で、ライフスタイルを求めて積極的に現地社会に溶け込もうとする新移民も現れ、それぞれが置かれている社会文化的環境は異なるが、かつてカンボジア華人が経験してきた現地化のプロセスの初期段階をたどっていると思われる。シアヌークビルという場でカンボジア華人、中国新移民、現地住民が重層的な関係を織り成しており、そのダイナミックな関係の中でシアヌークビル自体も大きな変容を遂げている。

国際観光はコロナウイルスから確実に回復している。2023年2月の調査時点でシアヌークビルはすでに国内客と周辺諸国からの観光客で賑わっていた。中国からの観光客は戻りつつあり、中断していたビル建設の一部も再開している。本稿を執筆している時、北京では「一帯一路」の構想提出の10周年記念で国際フォーラムが開催されていた。コロナ後のシアヌークビルの変化を注視しつつ、カンボジアにいる中国新移民の動向について精緻度を高めて調査していきたい。

付記

本研究は日本学術振興会科学研究費補助金・基盤 (B) 「スマート・ツーリズムにみる観光の変容」(課題番号: 19H04384) と、若手研究「日本におけるVFR旅行の実態と成立プロセス—訪日中国人を事例に」(課題番号: 20K20088) の一部の補助を用いた。

注

- ¹ 一般的に華僑は中国の国籍を維持し、一時的に海外で居住する中国人のことを指す。華人は、中国にルーツを持つが、すでに居住国の国籍を取得する中華系の人たちを指す。また中国人民共和国の国境が閉ざされる以前海外へ移住したオールドカマーズと区別して、当該国と国交回復後に流入した人びとをニューカマーズと呼ぶ場合もある（例えば、田嶋 2018）。だが華僑華人の現地化が進むにつれ、とくに2世、3世以降は中国出身地に愛着を感じず居住国にアイデンティティを覚える人たちが出現し、華僑華人を識別する意義自体が問われる。本稿は稲村（2011）に倣い、中華人民共和国籍の中華系人を中国人、カンボジア生まれの中華系人を華人、マレーシア、タイ、シンガポールなど外国籍中華系人を華僑とする。
- ² 一带一路はシルクロード経済ベルト（一路）と「21世紀の海上シルクロード」（一路）の略称である。アジアとユーラシア大陸諸国の連携強化を目的に、2013年に中国の習近平主席によって提起された構想である。その内容は、政策協調、インフラの連結、貿易の活性化、金融提携、留学や観光を含む文化交流が含まれる。全体構想の一部を示す特定の領域にも名称が付けられ、カンボジアを含むインドシナ半島は、中国—インドシナ半島経済回廊と称されている。
- ³ 野澤は出世地、国籍、母語を基準に、カンボジアにいる中華系人を僑生華人と新客華僑に区別している。前者はカンボジア現地出生、現地国籍保有、現地語が母語の3要素を同時に満たす者（中国から移住してきた老華僑を除く）とし、それと対照に中国出生、中国籍保有、中国語が母語の3要素を同時に満たす者（香港・マカオ・台湾出身者を含む）を新客華僑としている（野澤 2006b; 27）。
- ⁴ 50代、60代の華人が中国標準語を理解できないのは、1970年以降の混乱期にカンボジアの華語教育が中断され、カンボジアの各政権は華人に対して差別・迫害政策をとったことに起因していると考えられる。
- ⁵ 「本頭公」はベトナム、タイ、カンボジアなど東南アジアの華人に広く信仰される神で、「土地公（土地神）」として廟で祭祀されることが多い（中西 2002）。実際シアヌークビルの「本頭公廟」では本頭公のほか、関羽、観音、媽祖など多種多様な神が祀られている。なかには、忠義の象徴とされる関羽が主神の位置を占めている。
- ⁶ シアヌークビルにおける観光開発をめぐる歴史的展開について、板垣・李が共著する別稿（掲載予定）で詳述する。

参考文献

- 綾部恒雄・石井米雄 編．（1996）．『もっと知りたいカンボジア』．弘文堂．
- Bühler, T. (2020). Effects of Chinese investments in Sihanoukville on the local community. *Journal of Asia Pacific Studies*, 5(4).
- Calabrese, L., & Wang, Y. (2023). Chinese capital, regulatory strength and the BRI: A tale of 'fractured development' in Cambodia. *World Development*, 169, 106290.
- Chen, S. A. (2018). The development of Cambodia–China relation and its transition under the OBOR Initiative. *The Chinese Economy*, 51(4), 370-382.
- 陳世倫．（2016）．東埔寨華人社群研究的文獻回顧與現狀．華僑華人學刊，（3）．
- 崔晨．（2018）．“一帶一路”と東南アジア華僑華人．拓殖大学政治行政研究，9, 95-110．
- 板垣武尊．（2018）．「アジア地域におけるバックパッカーの目的地の変遷」．李明伍・臺純子（編），『国際社会観光論』（pp.161-182）．志學社．
- 稲村務．（2003）．カンボジアにおける華人組織の復興—プノンペン市における事例研究．人間科学，（11）．琉球大学法文学部．pp157-179．
- Muttarak, R. (2017). Moving Along the Belt and Road: Implications of China's "One Belt, One Road" Strategies on Chinese Migration (沿“一帶一路”的移動：“一帶一路”戰略對中國人口遷移影響)．

- Translocal Chinese: East Asian Perspectives*, 11(2), 312-332.
- 奈倉京子 . (2018). 「序章 中国系新移民の新たな移動と経験」, 奈倉京子 (編著), 『中国系新移民の新たな移動と経験—世代差が照射する中国と移民ネットワークの関わり』 (pp.25). 明石書店 .
- 中西裕二 . (2002). 「ベトナム南部におけるオン・ボン神と本頭公—ある華人起源の信仰」. 吉原和男・鈴木正崇 (編), 『拡大する中国世界と文化創造 - アジア太平洋の底流』 (294-317). 弘文堂 .
- 野澤知弘 . (2004). カンボジアの華人社会—僑生華人と新客華僑の共生関係—. *アジア経済*, 45(8), 63-99.
- . (2006a). カンボジアの華人社会—新客華僑社会動態に関する考察—. *アジア経済*, 47(3), 21-58.
- . (2006b). カンボジアの華人社会—プノンベンにおける僑生華人および新客華僑集住区域に関する現地調査報告—. *アジア経済*, 47(12), 23-48.
- Nyiri, P. (2014). *New Chinese migration and capital in Cambodia*. In *New Chinese Migration and Capital in Cambodia*: ISEAS Publishing.
- 大谷順子 . (2022). 中国の「一帯一路」政策に関する研究の国際的動向 . *Asian Journal of Middle Eastern and Islamic Studies*, 13(2), 278-293.
- 彭暉 . (2000). 柬埔寨華僑華人現状 . *東南亞縱横*, (S2), 108-111.
- 田嶋淳子 . (2018). 中国系ニューカマーズがもたらす地域社会の変容—東京豊島区池袋とミラノ市サルビ地区の比較から (pp.223-241). 移動と移民—複数社会を結ぶ人びとの動態 . 昭和堂 .
- Willmott, W. E. (1970). *The Political Structure of the Chinese Community in Cambodia*. University of London, Athlone Press.
- Wang, S., Meng, G., Zhou, J., Xiong, L., Yan, Y., & Yu, N. (2021). Analysis on geo-effects of China's overseas industrial parks: A case study of Cambodia Sihanoukville Special Economic Zone. *Journal of Geographical Sciences*, 31, 712-732.
- 山下清海 . (2019). 『世界のチャイナタウンの形成と変容：フィールドワークから華人社会を探究する』. 明石書店.
- 張慧 . (2018). “一帯一路” 与波蘭中国移民の演变趨勢研究 . *人口研究*, 42(3), 101-112.
- 朱東芹 . (2018). 「中国新移民」の現状 . 『中国系新移民の新たな移動と経験—世代差が照射する中国と移民ネットワークの関わり』 明石書店, 36-74.
- 朱東芹 . (2020). 「柬埔寨的中国新移民研究」. 賈益民, 庄国土 (主編), 『華僑華人研究報告』 (pp. 314-339). 北京 : 社会科学文献出版社 .
- 庄国土 . (2009). 東南亞華人数量的新估算 . 廈門大學學報 (哲學社會科學版), (3), 62-69.
- ウェブサイト情報
- Fullerton, J. (2018). *Cambodian unease as Chinese casinos turn seaside paradise into 'Macau No 2'*. *The Telegraph*.
<https://www.telegraph.co.uk/news/2018/08/11/cambodian-unease-chinese-casinos-turn-seaside-paradise-macau/> (2023年10月18日最終アクセス).
- Ministry of Tourism, Kingdom of Cambodia, *Tourism Statistical Report (from 2007 to 2022)*. www.mot.gov.kh (2023年10月18日最終アクセス).
- 南七道 . (2019). 「疯狂的柬埔寨, 亢奮的中国人」. 虎嗅,
<https://www.huxiu.com/article/321044.html> (2023年10月18日最終アクセス).
- Pisei, H. (2018). *Sihanoukville tourism First half of 2018 sees 1.3M visitors*,
<https://www.phnompenhpost.com/business/sihanoukville-tourism-first-half-2018-sees-13m-visitors>, (2023年10月18日最終アクセス).
- Rann Reuy. (2023). *359 high-rise building construction sites remain stalled in Sihanoukville* ;
<https://www.phnompenhpost.com/post-property/359-high-rise-building-construction-sites-remain-stalled-sihanoukville>, (2023年10月18日最終アクセス).

- 友田 大介 . (2021). 特集：コロナ禍後の新時代、中国企業はどう動く—中国企業、カンボジアで圧倒的な存在感，
<https://www.jetro.go.jp/biz/areareports/special/2021/0301/656329a08dbdabb9.html> (2023 年 10 月 13 日最終閲覧).
- 中国人民共和国商務部 HP, シアヌークビル経済特区投資紹介：
<http://cb.mofcom.gov.cn/article/zxhz/sbmy/200904/20090406149906.shtml>, (2023 年 10 月 13 日最終閲覧).
- 中国人民共和国商務部・国家統計局・国家外貨管理局. 「中国対外直接投資統計公報」(2009 年～2023 年). 中国人民共和国商務部 “走出去公共服務平台”：
<http://fec.mofcom.gov.cn/article/tjsj/>. (2023 年 10 月 18 日最終アクセス).
-

Accepted on 1 November 2023